

研修会のお知らせ
21 ページ参照

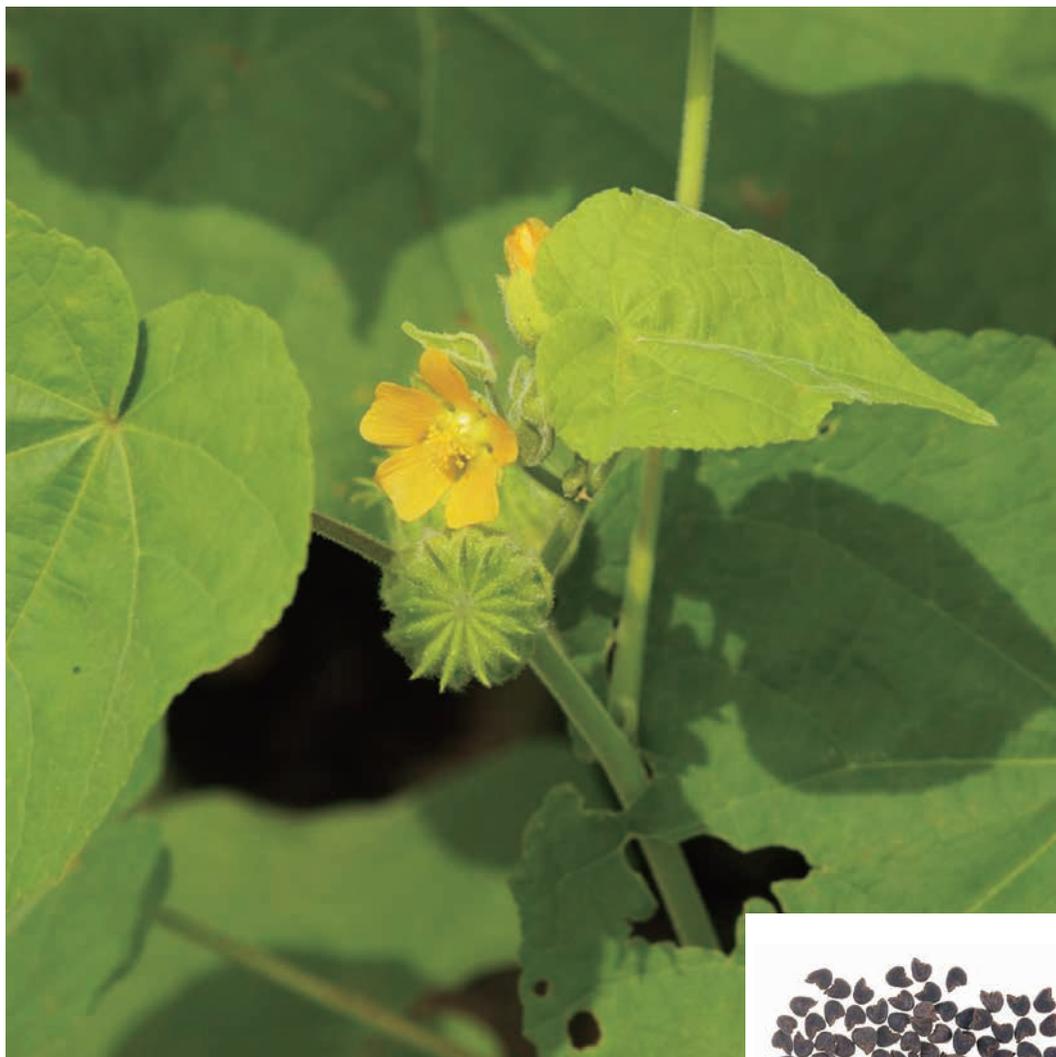
平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年9月1日発行

2014.9
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

9号

第36巻
No.302



イチビ *Abutilon theophrasti* Medik. (アオイ科 *Malvaceae*)

生薬 ケイジツ（蒴実）秋に果実が成熟した時、地上部を刈取り、陽乾してから種子をたたき出し、篩で選別する。

成分 linoleic acid、その他不祥。

効能 下痢、翼状片（眼病の一種）、瘰癧（頸部リンパ腺腫）、腫物に煎じて、または散剤として服用。



生薬 イチビ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



インド原産で中国を経て日本に渡って来た外来種です。中国には4,000年前には伝わったと言われていますが定かではありません。『新修本草』(659)に初めて収載され、「今世間で皮を取って布や縄にする」また「赤、白の冷、熱痢には、炒つて研末して密湯で一錢を服す。癰腫の頭なきには一箇を呑む」と記されています。後の『図経本草』(1062)にも「これを栽培して布に紡ぎ縄に縋ふ」、「やはり痢を治す」とあり、更に李時珍(1518-1593)は「現今いふ所の白麻のことだ。卑湿の場所に多く生え、一般には栽培もする。……茎は軽虚で潔白である。北国地方では皮を取つて麻にし、茎には硫黄をつけて焔燈(つけぎ)に作る」、「目翳瘵肉(翼状贅片)に主効があり、倒婕拳毛(さかさまつげ)を起す」と薬効と共に繊維として用いる重要な作物であったことが記されています。日本には平安時代に伝わって栽培されたようで、『本草和名』(918)に「菑実、和名以知比」と記され、『大和本草』(1709)や『本草綱目啓蒙』(1803)に詳しく植物を説明していることから、江戸時代までは繊維植物として使われていました。

現在、日本での薬用としての利用はあまりありません。中国では市場に冬葵子の名で売られている生薬は全て菑実であると言われています。以前、冬葵子の名で中国で購入した標本も菑実でした。アオイ科のフユアオイ(*Malva verticillata*)の種子は冬葵子と呼ばれ、『神農本草経』の上品に収載され、利尿、緩下、催乳の効果があるとして菑実と違った使われ方をしています。菑実を冬葵子として使ってよいものかは今後議論の余地があるものと思われます。

最近、北アメリカで栽培されなくなったイチビが難防除雑草として問題になっています。草丈は2mを超え、繁殖力が強く、多くの種子を生産すると共に、一度播かれると20年も発芽能力を維持する種子はアレロパシー作用(他の植物の生長を抑える物質を放出する)もあり、トウモロコシなどの生育を妨げ、これを食べた牛の乳は異臭を放つとして嫌われています。問題になったのは最近10年程で、アメリカから輸入した飼料に混入して広がったと言われています。前述しました平安時代から栽培されている栽培作物がどうして急に侵略的外来作物になったかはっきりしたことは分りませんが、インドから中国に渡って日本に導入された東回りの種は雑草化することがなく、インドからヨーロッパを経てアメリカで繁殖した西回りの種が雑草化したようです。

(村上守一 記)